関西から元気を発信！ がんばろう日本のお父さん!

Best Father Award in Kansai Book 2022

2022年度 第15回
ベスト・ファーザー賞 in 関西
発表・授賞式

Best Father Award in Kansai 2022 Best Father Award in Kansai 2022 Best Father Award in Kansai 2022

15th Anniversary

2007 ～ 2022

受賞者インタビュー

今だから語れる
それぞれの父親論、子育て論

JLCA

大阪桐蔭高等学校吹奏楽部 監督／京都文教短期大学 客員教授

梅田 隆司

音楽で繋がり続ける人生

生駒山の麓、大阪外環状線（国道170号）沿いにある大阪桐蔭高等学校。野球、ラグビー、サッカーと全国レベルのスポーツ校の印象が強いが、甲子園での応援でいつも注目される吹奏楽部は、国内外での演奏会、トップミュージシャンとのコラボレーションと人気実力ともに群を抜いている。その吹奏楽部の文字通り指揮を執る監督の梅田さんに、5月のGW明けの平日夕方、たくさんの部員が練習する学内の大阪桐蔭シンフォニックホールの楽屋でお話をお聞かせいただいた。

インタビュー／文＝金住謙一郎、藤川典良　撮影＝仲里英樹

■自己採点は落第点

「ベスト・ファーザー賞自体、雲の上の存在だと思っていたので、突然お話をいただいた時にはびっくりしました。長男は『育てられた記憶が（笑）』、次男も『ふ～ん（笑）』と、家族が大変驚いています」。奥様の感想は、取材当日、急遽決まった屋外での写真撮影の際に、自宅から革靴を持ってきてくれたご本人に直接お聞かせていただいた。「家族で爆笑でした（笑）本当にみんなに感謝しないと」。家族全員が笑っての感想、その様子からも梅田さんの家庭内の立ち位置であったり、家族の仲の良さが窺い知れる。

梅田さんと奥様は結婚25周年の銀婚式を、5月3日に迎えたばかり。インタビュー中には指折り数えておきたいくらい「妻には子育てを任せっぱなしで、感謝しかない」と何度も話し、「これを機会に家庭を顧みないと（笑）」。とはいえ父親の学校での仕事ぶりはメディアでも取り上げているので、子どもたちにもしっかり伝わっているよう。「子どもたちは慕ってはくれています。こういう機会をいただいたので、さらに親子の絆を深めていけたらなと思います」と、メガネの奥の目を細める。

「今春、長男は大学を卒業し社会人になり、次男は大学3年生になりました。家では『子育てをしなくてももらえる賞か』と笑われましたが、これを機会に家族間の交流が深まればと思いますし、生活文化という意味でも大変に有意義なことだと思っています。今回ベスト・ファーザー賞 in 関西をいただいて、児童福祉施設の子どもたちとの交流イベントを行なっているメイク・スマイル・プロジェクトの活動など、賞の裏側にある大切なものを感じ取ることが大事なことだと思っています」。

梅田さんは27歳から教師を務め、これまでずっと吹奏楽漬けの生活。子どもの運動会も、少し顔を出す程度だったという。自身に父親としての点数をつけるとすれば100点満点で何点？

「いや～、この賞をいただくには恐縮なほど、落第点だと思います。10点ぐらいはあるのかな？（笑）」と、自己採点は低い。

■人と人との繋がり

「長男は、妻に似てしっかりもので、ちょこちょこ僕も息子から諌められます。次男は体育系の大学に進学したのですが、『20歳になったから好きなことをさせて』と音楽の道に進みたいと言い出し、大阪芸術大学音楽科に編入したんです。僕の姿を見てかどうかは分かりませんが、自分なりに新しい道に進もうとはしている。それもこれからは、見守っていきたいですね」。

今春、長男から嬉しい誘いも。「初任給が出たからご馳走すると夫婦で呼び出されて、しかも銀婚式のお祝いも。本当は、『うちの親父はっ!!』と呆れて、早々に家を出て行くのかと思っていたけど、妻のおかげでスクスクと育ってくれ、意外と懐いてくれています」と、奥様には申し訳なさと全幅の信頼を寄せる。

奥様との出会い、それは梅田さんが小さなお子さんの合唱団を教えている時に、ピアノ伴奏をやっていたのが、当時音大生だった奥様。「いい子がいるなと思って歳を聞いたら、ちょっと離れているけど彼女も音大で、僕も音大出なので後輩なのをうまいこと利用しながら、付き合い出して（笑）。でも、彼女は一人娘で僕とは17歳も歳が離れているから、彼女の親御さんからめちゃくちゃ反対されて……。結婚するまで10年かかりました（笑）」。元々、小学校、中学校で教師をしていた奥様。「彼女は、ピアノも得意でオールマイティ。いい相棒に恵まれました」。今は大阪桐蔭吹奏楽部の非常勤講師も務めていて、公私共に、良いパートナーだ。

家庭はどうしても疲れの癒し場みたいになってしまい、しっかり者の奥様には「あんたはしっかりしなあかん」と叱咤激励されているという。けれど吹奏楽部監督としては、生徒たちに向き合い、常に全身全霊で取り組んでいる。

「吹奏楽部の生徒たちは保護者から預かっているので、責任を持って育てていかなければ、とやってきていました。私が監督を務めてから、桐蔭吹奏楽部のOBもこれまで700人ぐらい。それ以前も中学校で27年間、今でも繋がっている卒業生もいます。さらに、生徒の保護者とも。大事なのは人と人との繋がり、それが一番。その意味では、少しは社会のお役に立てているのかなと納得できるし、本当に生徒との関わりについては僕自身自負するくらい、あくまでも生徒の成長のためを思ってやっています。そして演奏するにあたっては、聴いてもらう人のために。聴いてもらっている人が楽しめるような音楽が、僕のベースです」。

シンフォニックホール内の大合奏室にて

■人のために…父親から受け継いだもの

理想とする父親像について、梅田さん自身のお父様が手本になっているという。

「僕が今あるのは、親父の生き様を見てきているので。母親が疎開先の岡山から大阪に戻って来た時に、親父は高校卒業してすぐに岡山から裸一貫で大阪に、姉さん女房の母親の元にやってきました。ブラウン管を作る製作所を立ち上げて、親父は一生懸命やっているのを見ていました。カラーテレビが出て来た時には負債を抱えて仕事が厳しくなりましたが、面倒見が良い親父は、近所の人に対していろんなお世話をしたりしていたのを横目で見ながら育ちました。人との付き合いはそこで学んだかな。親父には、人のためにやることが大事と教えられて来ましたね。親父は地域に困った人がいたら、夜中でも膝詰めで話していたのをよく見ました。相手が納得したら喜ぶ姿を見ていたので、それが僕の原点です」。貧しいながらも、中学生の時に母親がトランペットを買ってくれ、高校の時は家業が厳しく定時制に。それでも音楽熱は冷めることなく高校生の時にはバンドを組み、大学へは自力で音大へ進学。そこでも、夜は演奏の仕事で稼ぎ、音大卒業と同時に教師になった。大阪市内、さまざまな地域の学校を経てきた。

「もちろん、いろんな保護者の方がいます。けれど、しっかりお話をすればわかってくれる。保護者の方が自分のお子さんを大事に思うのは、当たり前のこと。でもそのあまり、浮きだってしまっては、自分の子のためにはならないと話しをすればわかっていただける。そういう保護者も巻き込んで、いいものをつくっていこうということが僕のポリシーです。結局、保護者と教師、保護者と子どもと話し合いが大事なんです」。梅田さんのお父様が、困っている人の話を聞き、相手が納得して喜んできた姿と梅田さんの姿が重なる。

■3つのポリシー

梅田さんは、吹奏楽をやる上で意識していることが3つあるという。

「一つは、できるだけ多くの人たちの繋がりを作ることができる演奏活動をしよう。もう一つは歌う吹奏楽。〝歌〟っていうのはメッセージがあるんですよ。そのメッセージを大切にしながら歌い、そこに音楽の旋律をのせて人々と繋がりを持たせる。そして最後は、常に全員で。今部員は179人いるんです。例えば、ソロをやる子、目立つ子がいる。でも、その子の影で支えるチューバなどの低音楽器。その子たちがいるから、ソロが活きてくるということを常に理解して、全員でチームワークを持って発表活動をしようというのが僕のポリシーです。

少なくとも大阪桐蔭に来てから17年間、走り続けて来たつもり。うちは演奏会をやればやるほど、次回の依頼も多くて、演奏会をやるたびに繋がりができてくる。それは、3つのことを大切にしながら、生徒たちにも、演奏会に来ていただいた人たちにアプローチができているからかなと思っています」。吹奏楽部は学校のクラブ活動に他ならないが、それでも演奏公演依頼は多く、コロナ前は年間90回、コロナ禍の昨年でも25回の演奏依頼があった。

家庭での子育て同様に、いやそれ以上に保護者から大切な子どもたちを預かる身として時代を経て、ますますその難しさは増している。

「音楽をやって来た生徒には周りが見えないような子も稀にいるんですけど、『使命を自覚したときに、才能の芽は急速に伸びる』ということを伝えています。

僕は先輩・後輩のけじめは、あまりつけないんです。先輩に任せたら後輩に指示してくれるから、顧問は楽。でもそこに、先輩の威圧でまとめようとすることがあったり、その先輩がしっかりしていたらいいけど癖のある子なら後輩にも変な癖がついたりしてしまう。だから僕は、先輩にあまり偉そうにはするなと、むしろサポートに回れと言っています。1年は伸び伸びと、2年生は自覚を持って、3年生になると、できるだけ自分はしっかりして見本を見せる。でもそれが、生徒たちが学年を通じて、とても和気藹々と楽しそうにやっているということはよく言われるので、よかったかなと思います」。

■音楽は魔法

2020年2月、文部科学省は新型コロナウィルス感染症対策のための小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における一斉臨時休校を申請した。その緊急事態宣言下の4月、大阪桐蔭高等学校吹奏楽部の部員が自宅からリモート演奏する「テレワークで演奏してみた!」をYouTubeにアップし、話題を集めた。

「繋がる、歌う吹奏楽、全員でという3つの方針が根底からぐらつきましたから。出会いがなくなる、歌ってはアカン、全員はダメ。これは悩んだし、負けてられへんと思った。この3つを持続可能なものにしていくかと悩んだ結果がアレでした。シールドも僕が作ったんです。マウスピースの穴も開けて。マウスシールドをしないと練習ができないとなると、子どもたちも苦にならないと言い出して。みんなうちの子たちは練習が好きな子たちが集まっているので、練習ができるならマウスピースも苦にならないと生徒たちも言い出したので、あの動画です」。

歌う吹奏楽は、創作ミュージカル『河内湖』、『OGATA洪庵の妻』など、だんだんミュージカル部のようにさらに進化成長している。今年70歳の梅田さんだが、生徒たちが成長している姿を見て、さらにその情熱は増していくようで、「この先も可能な限り活動させていただけたらと思っている」という。

今年の梅田さんの古希の誕生日、練習途中の生徒たちからサプライズの『Happy Birthday to you』。スクリーンには歴代の部長、教え子たちが次々と登場、お祝いのメッセージが送られた。音楽と歌を通じて繋がる、生徒たちにとっての、ベスト・ファーザー梅田さん。

「音楽って、とても素敵なアイテム。音が鳴っただけで気持ちが変わる、これは魔法。音楽の仕事をさせていただきながら、同時に子どもたちや保護者と、人と人との交流ができる仕事をさせていただいている、感謝の思いですね」。

関東で暮らすご子息ふたりと再会時の一枚

Profile 梅田 隆司 さん

▼1952年2月16日生まれ、大阪市出身。
▼大阪桐蔭高等学校吹奏楽部 監督／京都文教短期大学 客員教授。
大阪市の中学校で27年間、大阪市の教員として、また吹奏楽部の顧問として生徒を指導。全日本吹奏楽コンクールに計5回の出場を果たす。2006年、大阪桐蔭高等学校教諭並びに同校吹奏楽部の総監督に就任後、創部して2年も経たない同校吹奏楽部を全日本吹奏楽コンクール初出場に導き、その手腕を遺憾なく発揮する。その後も、数々のコンクールやコンテストで、輝かしい成績を残し、日本国内はもちろん海外公演も精力的に行い、音楽の魅力を内外に発信し続ける。